

強者の戦略

《解説》

さて問題から一週間たちましたが、どうでしょうか。何を書くか思い浮かびました？日々暑いですが、頭はクールに心はホットに夏を乗り切ってください。

私たち講師陣は夏の講習に、それから「スパルタン」にフル稼働です。前はやせたことを書きましたが、前回よりハードな今、なぜかやせるのは一旦とまっています(笑)。どうしてでしょう…丸々とした顔でE-Lectureの画面にうつることだけはさけておきたいと思います。ではワンポイントの解説です。

さて、まずイスラーム史において一つの大きな転機となるのが、アッバース朝が分裂していくこと、そしてアッバース朝のカリフの権威が低下していくことです。

皆さんの頭の中に数学の公式のように「10世紀＝アッバース朝カリフの権威低下」とインプットしておいてください。

では、政治・社会・宗教において、重要と思われる部分を箇条書きにまとめてみます。もし他にも「これはどうですか」というものがありましたら、遠慮無く質問してきてください。いつもそうですが、私が提示するのはあくまでも「解答例」ですから。

[政治面]

- ・10世紀に入ると、それまで強かったアッバース朝の衰退が顕著となる。
 - 大帝国であるアッバース朝が分裂をしていきます。アッバース朝はウマイヤ朝のようにアラブ人のみを高級官僚につけたのではなく、さまざまな民族をイスラーム教徒であれば登用していきます。よってトルコ人やイラン人などの王朝・軍事政権が次第に台頭してくるようになります。
- ・唯一のカリフだったアッバース朝に対抗し、ファーティマ朝や後ウマイヤ朝もカリフを称する。
 - シーア派のファーティマ朝は自分たちシーア派こそ正統であるとして、建国当初から君主はカリフを名乗りました。またアッバース朝に対抗する後ウマイヤ朝もカリフを名乗りました。いわゆる「3カリフ国」ですね。本来唯一の存在であるイスラームの最高権威であるカリフがこんなにいるなら、やはり権威の低下は避けられないでしょう。それだけアッバース朝が弱くなっていった、ということの現れです。
- ・ブワイフ朝にバグダードに侵入されカリフの実権を奪われた。ブワイフ朝の君主は大アミールを名乗る。
- ・11世紀になって、セルジューク朝の建国者トゥグリル＝ベクがスルタンの称号を得た。
 - 以上の2点については、アッバース朝のカリフが政治的権限を失ったことをあらわすできごとです。カリフはもともとムハンマドの死後にクライシュ族の中から選挙で選ばれ(正統カリフ)、イスラーム共同体をひきいる政治的・社会的権限のみをもっている存在でしたが、アッバース朝ころになるとカリフは政教両面の長として、君臨していました。ところがアッバース朝カリフはブワイフ朝によって攻められて、ブワイフ朝君主は大アミールの称号を得ます。これは全イスラーム世界の軍事指揮権と

強者の戦略

統治権を手にする称号で、これによってカリフの指導権は名目上のものになりました。11世紀にはセルジューク朝がこれを倒し、イスラーム世界の世俗君主であるスルタンの称号を得ます。これによってカリフは宗教的権威のみの存在となりました。このカリフの問題は多くの論述問題でとりあげられています。2004年の東京大学の問題は7世紀前半と11世紀後半のカリフを比較する問題でした。

- ・ イスラームといえばアラブ人だったが、トルコ系民族のイスラーム化と台頭。

カラ=ハン朝などトルコ系王朝の成立。イラン人国家もできる。

→トルコ人にイスラームが広がっていきます。アッバース朝にマムルークとして採用されたり、また中央アジアにサーマン朝が建国されますが、ここからトルコ人にイスラームが伝播し、10世紀にはトルコ人最初のイスラーム王朝であるカラ=ハン朝が成立、トルコ人のイスラーム化に拍車がかかります。その後はトルコ人王朝がかなり大きな勢力をもつようになります。

[社会面]

- ・ 軍人や官僚に対しては従来、俸給を与えるアター制であったが、一定地域の徴税権を与えるイクター制がブワイフ朝で創設され、セルジューク朝で定着し、イスラーム社会の封建化が進展した。

→ 9世紀半ば以降、地方でのマムルーク達の台頭によってカリフ権力が衰え、国庫収入が激減しました。そのためアター制が維持できなくなり、そのため軍人や官僚に対して王朝への忠誠と引き替えに、俸給の額にみあう金額を徴収できる土地の管理と徴税権を与えました。これがイクター制の始まりです。ブワイフ朝で始まり、セルジューク朝で整備され、その後多くの王朝で採用されます。イスラーム社会の封建化、と位置づけていいでしょう。

[宗教面]

- ・ イスラームの形式主義に反対してスーフィズムが生まれ、教団の設立と共にイスラーム教の大衆化が進んだ。

- ・ シーア派の王朝が大きな勢力を築き、シーア派王朝の方が優位にたった時期でもあった。

→解答例には入れてませんが、シーア派について以上のような点を触れてもいいと思います。

《解答例》

政治面では、10世紀に入るとファーティマ朝や後ウマイヤ朝もカリフを称するようになりアッバース朝カリフの権威低下が顕著となり、イラン系ブワイフ朝はバグダードに侵入してカリフの実権を奪った。またトルコ人の傭兵化とイスラーム化が進展してカラ=ハン朝が成立、イスラーム化がより促進された。11世紀にセルジューク朝がスルタンの称号を得ると、カリフの権威は完全に失墜した。社会面では従来の俸給によるアター制から、徴税権を与えるイクター制がブワイフ朝ではじまり、セルジューク朝で定着、イスラーム世界の封建化が進展した。宗教面ではイスラームの形式主義に反対してスーフィズムが生まれ、教団も設立され、農民や商工業者など大衆に拡大した。(300字)

強者の戦略

これから東大や京大など難関国公立を目指す方は、まず知識をゆるぎないものにしてください。それがあつた上で論述対策が活きてくるのです。

では、研伸館の教室授業の「論述世界史」、E-Lectureの「京大スパルタン」（9月からは「東大スパルタン」も開講）もよろしくお願いたします。

チーム・スパルタン 北林久忠